

エー A G 5 だより

在外教育施設の新たな挑戦に向けて—2019年度のAG5の取り組み

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG5 (Advanced Global Five) プロジェクト)を開始して3年目を迎えました。2019年度の取り組みの大きな特徴は、これまでの2年間の成果を踏まえて新たな学校への支援を行うことです。今回は今年度の取り組みについてご紹介します。

AG5プロジェクトの基本的な視点

この事業を行う上での基本的な視点を確認しておきます。私たちが大切だと考えているのは次の二点です。

第一は、各学校のニーズと実態にあつた支援策を共に考えることです。これまでの取り組みも、例えば香港日本人学校は当時の運営委員会からの「子供の数の減少への対応として、選ばれる学校づくりができないか」という要望から始まったものです。

台湾の日本人学校では、国際結婚家庭の子供の増加に伴い、日本語教育が課題でした。こうした子供には高い中国語能力があります。そこで、中国語と日本語の両言語の力を伸ばすための取り組みを開始しました。

ダラス補習授業校でも、永住者や国際結婚家庭の増加と共に、英語を第一言語とする子供が多くなり、日本語教育が課題でした。英語力も日本語力も多様な子供同士が共に学べる教育を構想するためにプロジェクトがスタートしました。

アスンシオン日本人学校では、パラグアイの日系移民に日本の文化や教育を発信するための企画を行いました。日本人学校を日系人に対する日本の教育の発信拠点として整備し、それが日本人学校の経営や実践にも

プラスになるというものです。

西大和学園カリフォルニア校は、学校にある図書館を活用することで現地の交流校や現地の人に対して日本文化や情報を提供することを目指したものです。このように、この事業は各学校のニーズや実態に対応して取り組んできました。

第二は、在外教育施設の将来像を描けるものを共につくりあげることです。日本人学校や補習授業校は、それぞれ多様性に富み、各校違っています。その成果は、工夫如何で他校でも実践可能なものになります。

“good practice”という言葉を用いたことがあるでしょうか。いい実践に注目し、その実践から学んでいくという考え方です。この二年間にやってきた各校の取り組みは、good practiceであり、他校でも十分に参考になるものです。

例えば、香港日本人学校の「グローバルスタディーズ」(以下GS)のカリキュラム開発は、目標・内容構成・教材・学習活動・評価などのポイントを明確にすることで、他校でも実践が可能です。また、在外教育施設は先生の任期が二〜三年と限られていますし、運営委員の任期もほぼ同じようなものです。したがって、同じ学校の取り組みでも先生や運営

委員が代わると継続しないといった問題を抱えています。このプロジェクトでは継続性を担保するために、管理職を含めた先生方はもちろんですが、できるだけ多くの運営委員の皆さんにも極力関わっていただくようにしました。さらに、次に挙げる継続可能なプログラムを開発することで実践の継続性も意識しました。

今年度はそれを水平展開し、新しい学校での取り組みも始めますが、こうした視点で進めていきます。

(1) 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

これまで香港日本人学校香港校小学部でグローバルな能力を育成するための実践に取り組んできました。広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材を育成することが目的です。小学四年生から「グローバルクラス」を開設し、独自のカリキュラム開発を進め、今後の日本人学校の教育の方向性が見えてきました。成果については本欄で報告済みですが、他の日本人学校でも実践可能なのは新設教科のGSです。

GSは探究学習をもとに調査力、分析力、論理力、プレゼン力などの能力を高めること、国際的な問題や課題を扱うことでグローバル市民の育成を図ることを目標としています。その探究のサイクル学習活動の流れは次の六段階です。①課題の背景や基礎的な知識に触れるステージ、②知識や情報を調査から得るステージ、③身につけた知識や調査で得た情報を整理するステージ、④自分の学びを振り返り、さらなる調査を進めるステージ、⑤単元での学びから自分の結論を出すステージ、⑥自分の学びをコミュニティに還元すべく行動するステージ。こうしたプロセスを明確にすることで、他の学校での実践の参考になります。

今年度はシンガポール日本人学校とパリ日本人学校で新たな取り組みとして、広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力を育成するための「探究科」の単元の開発と実践を行います。シンガポール日本人学校ではESD（持続可能な開発のための教育）を中心に小学部で「探究科基礎」という実践を行っています。パリ日本人学校でも「水」をテーマに探究学習を行うことになっています。各校でのニーズがあれば「探究科」で英

語力を向上させる取り組みも行っていきます。三校の実践から二〇二〇年度には「探究科」の目標、内容構成、教材、学習活動、評価などを明確にし、他の日本人学校でも実践可能なモデルを構築する予定です。

(2) 日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

台湾の日本人学校には国際結婚家庭の子供が多く在籍しています。一八年度は、台北日本人学校の小学一・二年生を対象とした日本語補習プログラムと台中日本人学校のJSLカリキュラムの視点を取り入れた在籍クラスでの教科指導計画案を開発しました。また、高雄日本人学校を含めた台湾の三校で日本語指導に関する研修を行い、先生方の日本語教育の指導力の向上を図りました。

台北日本人学校は放課後に週一回三十分の日本語補習を行っています。そのため二十回分のプログラムを開発しました。一年生では「えをみてはなそう（国語）」（どこに何があるかを文レベルで話す）、「なんばんめ（算数）」（何番目、何人目などがどれを指すかを確認する）、「くちばし（国語）」（問と答えのセット

がわかる）、「がっこうのここと1（生活）」（どこに何があるか、語彙）、「がっこうのここと2（生活）」（どこに何があるか、どこで誰が何をしていたかが言える）など教科と関連づけた二十の単元を示しました。単元ごとに、「日本語補習の目標」「指導のポイント・留意点」（日本語指導経験がない教師に向けたアドバイスなど）、「指導したい語彙・文型」、「具体の展開例」が示されています。

台中日本人学校では授業の中でどのような日本語の支援が効果的かを提案しました。例えば、各教科で難しい言葉、理解が困難と思われる言葉を他の言葉に置きかえるなどの支援策を示しました。この二つの学校の成果を今年度中にまとめて刊行することになっています。

今年度は台湾の日本人学校の成果を踏まえて、マニラ・大連・青島の日本人学校で日本語教育の取り組みを開始します。マニラでは、国際結婚家庭の子供に対して日本語指導を行っています。より質を高めていくことが課題になっています。そこで、台北日本人学校の取り出し型の日本語指導プログラムを参考に、日本語教育の実践を行うと共に、それをもとにプログラム開発を行います。青島と大連では、台中日本人学

(3) 補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

ダラス補習授業校を対象にしたプロジェクトはこの二年間で大きな成果がありました。少ない授業日数で、日本語力に大きな差がある子供を対象にした日本語教育をどう実践するかを考えてきました。生徒たちは平日は現地校に通っており、英語力が優位な子供も多くいます。そうした中、日本語力を向上させることでバイリンガル・バイカルチュラルな人材を育成しようという取り組みです。日本語力の違う子供たちが共に学べる単元開発を行い、日本語で考え、調べ、発表するという学習を行ってきました。この実践を通して「日本語で考える力」「発表する力」が大きく向上することがわかりました。

一八年度はダラス補習授業校で、オースチン・クリーブランド・コロバスOH・シカゴ・シンシナティ・セントルイス・ワシントンDCなどの補習授業校の協力のもとに小学校高学年の単元開発を行いました。また、TV会議でその実践した内容や方法について相互に検討する取り組みを行ってきました。

今年度は、ダラス補習授業校での単元開発を小学校全学年と中学校に広げると共に、実践を共有するための参加校を増やし、補習授業校コンソーシアムの構築を目指します。補習授業校の力量のある先生方のネットワークをつくり、相互に課題を解決できるようにしていきます。

(4) 南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

パラグアイの日系人コミュニティに対して日本人学校がどのような役割を果たせるか、果たすべきかについて、具体の取り組みを通して検討してきました。アスンシオン日本人学校に、アスンシオン日本語学校の教師を対象にした国語指導に関する研修会を行っていただきました。ま

た一八年度には「移住すゝろく」を開発しました。これは日本語学校でも使えるものです。パラグアイの日系移民は南米では比較的歴史が浅く、今後二世や三世の方が増えるにつれ日本人としてアイデンティティをいかに保持するかが課題になっていきます。日本人学校はその意味では日本を象徴する存在で、日本の文化、教育、さらに日本語教育などの発信拠点を目指すことが期待されています。

今年度も引き続き、こうした取り組みを継続的に行います。新たな取り組みとしては、アスンシオン日本人学校の小学三・四年生用の副読本の改訂です。新学習指導要領に準拠して行いますが、この副読本をアスンシオン日本語学校での日本語教材としても活用できるように開発する予定です。日系人の歴史や日本との結びつきなどの内容も入れ、日系人・日本人としてのアイデンティティ形成の一助にしたいと思っています。

(5) 学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発

西大和学園カリフォルニア校の取り組みは、学校図書館を地域に開放し、そこで多様な活動を行い、親日的な人材を育成することを目指しています。この二年間の成果の第一は、

日本文化を発信するためのイベントの開催とそれに関連する図書等の提供です。日本の図書や資料を現地の学校や住民に貸し出そうにも興味関心がない限り手にとってもらえません。一八年度はまず、日本文化を発信するイベントを企画・開催し、それにあわせて関連する図書や資料を提供しました。また、南カリフォルニア大学に本を貸し出し、そこで読み聞かせをするといった「移動図書館」などもユニークな取り組みです。

第二は、近隣の学区で日本語を第二言語として指導している小中学校や高校をリストアップしてアンケートを実施し、その結果からどんな支援が必要かを検討しました。

第三は二〇年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに関連する資料を収集したほか、日系人の歴史について中学生が学習するための資料を全米日系人博物館の協力を得て整備しました。

このプロジェクトの目標は「親日的な人材養成」です。どの程度、学校のリソースを開放し、それにアクセスしたかが評価の基準になります。一八年度はイベントを十回開催し、全体で三二六名の外部者が参加して活動が行われました。今年度も引き続きこの支援を継続していきます。

(6) ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発

このプロジェクトは今年度から開始します。日本人学校の教育の質を高めることを目的に、近隣の日本人学校と連携して、遠隔操作による教師研修や合同授業を実施する予定です。日本人学校は、小規模校が多く、子供同士での多様な意見交換やすべての教科において専門性の高い教師による指導を行うという点では課題があります。これを大規模な日本人学校、あるいは複数の日本人学校とICTを使って結びことで解決しようという取り組みです。

中南米の日本人学校で実践していきますが、今年度はICTを活用した遠隔での教師研修及び交流授業を実施し、子供や保護者、教職員へのアンケートなどによる評価を行う課題点を出し、二〇年度に本格的な取り組みを行う予定です。

以上が今年度の計画です。AG5プロジェクトは三年目を迎え、新たな学校を加えて支援事業を展開していきます。随時、本欄「AG5だより」やポータルサイトで報告していきますので、是非ご覧ください。